

学長室から

竹屋 元裕

「分子の音」を聴く

先月開催された数理・データサイエンス・AIに関する学術講演会で、熊本大学の中村振一郎特任教授の絶妙なトークを拝聴した。「未病のデータサイエンス」に始まり、「老人支配国家」、「自然知能と人工知能」へと話題が展開したが、一貫した主張は「空気で決めず、データで決める」ことであつた。

その中で多くの参加者の興味を惹いたのが、ソニフィケーション (sonification)、つまり科学データを直感的に理解するために音に変換することであつた。講演で紹介された「分子の音 身体の中のシンフォニー」(新井曜著、中村振一郎・井出祐昭監修、毎日新聞社) =写真=を手に入れた。付属のCDには13の分子の振動を音に変換したメロディーが収録されており、どの分子も心地良いサウンドとなっていた。

「分子の音」で思いつくのが稀代の生命学者 大野乾博士によるDNA音楽である。DNAの塩基配列を音にする試みだが、DNA塩基はAGCTの4種類しかないで、1オクターブにも足りない。そこで工夫されたのが、レから上のレまでの8音をAにレとミ、Gにファとソなど2音ずつ当てはめた。しかし、ど

ちらの音を選ぶかで人為的操作が加わってしまう。一方、中村版「分子の音」では、「人間の主観を介在させない非経験的アプローチをしてほしい」という中村の要望のもと、<サウンド・スペース・コンポーザー>である井出が中村と共同で約3年の試行錯誤を経てプログラミング・ソフトを完成させた。CD収録にあたっては3人のアーティストがそれぞれ得意の楽器で音色を与え、人の耳にやさしい音楽となっている。

この本は図書館に寄贈したので、是非、皆さんも「分子の音」を楽しんで欲しい。私のお気に入りには血液型Bとセロトニンである。さて、あなたのお気に入りには？



高齢者の「食べる力」をチェック

5年ぶり再開 松原准教授 (言語聴覚学専攻) ら

松原慶吾准教授 (リハビリテーション学科言語聴覚学専攻) のグループが9月29日 (金)、アリーナで高齢者への「食べる」ことに関する健康チェックを実施しました。

対象となったのは、西区の上近見地区に住む71歳から92歳までの20人です。本学の教員をはじめ、病院や施設に勤務している言語聴覚士、言語聴覚学専攻4年の学生を含んだスタッフ25人が、摂食嚥下 (食べること・飲み込むこと) に関係する筋肉の量と力、歯、心理面の状態など14項目をチェックしました。参加した高齢者は、若い学生やスタッフと楽しそうに会話を楽しみながら、ブースを回っていました。

松原准教授のグループは2018年から同様の健康チェックを実施していましたが、その後、コロナ禍の影響で中止しており、今回の参加者に対しては5年ぶりの開催となりました。久々の再開に松原准教授は「健康チェックを通して、食べたり、飲み込んだりする働きがコロナ禍前後でどう変わったかを考えるきっかけにしたい」と話していました。(入試・広報課)



「食べる」ことに関わる筋肉の量を測るスタッフたち

写真左は、講演する木下理事長。同中央は川口研究科長。同右は、熱心に講話に耳を傾ける学生たち



アカデミックスキル支援センター

「アカデミックスキルⅡ」 基調講義

レポート

木下理事長 「信念持って道切り開け」

川口研究科長 「思い切って飛び出して」

1年次生を対象にした全学必修科目「アカデミックスキルⅡ」が9月28日（木）に始まり、木下統晴理事長と川口辰哉研究科長が50周年記念館で基調講義を行いました。基調講義は、学びや将来の進路に対する構えづくり等を狙った、アカデミックスキル授業の根幹をなすものです。

木下理事長は、リハビリテーション学科の学生を前に「医療人の魂」と題して講話。少子高齢化が進行するわが国の人口動態や地球温暖化による感染症リスクの高まりについて触れた後、「変化する未来社会を見据え、われわれは何をなすべきか」と問いかけました。また、本学がこの1年間で進めてきた自治体、教育機関、スポーツ関連団体等との包括連携協定や、研究、広報に関する独自の取り組みを「社会を変える教育と研究の輪」として紹介。こうした取り組みに本学4綱領にある「思慮」「仁愛」の考え方を

絡めながら「この時期から、社会に貢献する医療人を目指し、人々の健康、命、QOLに携わるプロになるという信念を持って道を切り開いてほしい」と呼びかけました。

木下理事長に先立つ看護学科の授業では川口研究科長が登壇しました。医師としての歩みを紹介する中、30代で敢行した米国留学での出会いや経験に触れ「思い切って飛び出すことで得るものはある」と呼びかけました。大学卒業後のキャリア形成については、看護師のほか保健師、助産師、認定看護師など多彩な進路を紹介。「(看護の)プロとして生きていくという意識を持ち、この3年半で基本的な力を養ってほしい。その第一歩がアカデミックスキル授業」と説きました。

なお、医学検査学科の基調講義は10月19日（木）にあり、竹屋元裕学長が講義を行います。(NL編集部)

熊本ヴォルターズの11選手

健康・スポーツ教育研究センター

レポート

B2開幕控え 身体能力を確認

バスケットボールBリーグ2部（B2）熊本ヴォルターズの選手たちを対象にした身体能力等の測定会を9月20日（水）、アリーナで実施しました。7月に続き2回目で、今回も本村亮輔選手、駒沢颯選手など計11人の選手たちが参加。本田啓太講師を中心に教員、理学療法士、学生たちが計測にあたりました。

ウォーミングアップを終えた選手たちは、30秒走や俊敏性を見るアジリティテスト、動作解析など4～6種類を測定しました。選手たちは終始リラックスした表情ながら、身体能力の高さを見せつけてくれました。

担当した船越海人さん（リハビリテーション学科理学療法学専攻3年）は「1年次は知識がなかったけれども、学年が上がって知識や技術が身についてくると（計測内容等が）わかるようになってきた。（この経験を通して）自分も成長できて

いると思うし、選手たちの役にも立っていると思う」と話してくれました。

熊本ヴォルターズは10月7、8日、熊本県立総合体育館で滋賀レイクスターとの開幕2連戦に臨み、1勝1敗とまずまずのスタートを切りました。（入試・広報課）



動作解析に臨む熊本ヴォルターズの山本柊輔選手（左）

認定看護師教育課程

研修生12人

図書館主催の「私の部屋でランチを」が9月27日（水）、キャンパステラスで開催され、認定看護師教育課程で学ぶ研修生12人が「めざせ認知症看護のエキスパート!!～私が目指した理由～」と題して講演しました。

研修生たちは「認知症看護について勉強したい!」という共通の目的を持ち、九州各県（福岡、長崎、大分、鹿児島、熊本）から集まりました。各県の観光名所とともに、自身の所属する病院の紹介や「高齢の入院患者さんを何とかしたいから」、「患者さんが安心して生活してほしい」といった志望理由も披露。会場には学生も集まり、熱心に研修生たちの話に耳を傾けていました。

看護学科1年の松本彩那さんは、祖母が緩和ケア病棟でお世話になったことから緩和ケア関連の認定看護師を希望しているといい、「熊本での就職しか考えていなかったが、他県での仕事にも興味を持ちました」と話していました。

（入試・広報課）

銀杏アラカルト

■ 9月卒業式 `巣立ち、祝う`

9月卒業式が9月26日（火）、1204-1206会議室で執り行われました。本年度、対象となったのはリハビリテーション学科生活機能療法専攻の学生1人で、竹屋元裕学長から学位記が授与されました。引き続き、参加した教職員と一緒に笑顔で記念写真に納まりました。（入試・広報課）＝写真は卒業式後、記念撮影する参加者



母校の後輩を前に学生生活について語る川久保さん



■国府高1年生が来学 熊本国府高校の1年生120人が9月21日（木）に本学を訪れ、学内施設の見学や、模擬授業の受講等を行いました。生徒たちは入試・広報課職員から本学の概要説明を受けた後、レストランで昼食を体験。昼食後、アリーナの最新鋭の設備やトレーニングルームを見学しました。その後、1300L講義室で田邊香野講師の模擬授業を受講し、臨床検査技師の仕事について学びました。最後に、同校卒業生でリハビリテーション学科言語聴覚専攻2年の川久保凱斗さんが大学生活について説明。「高校生活と大学生活の違いは」「アルバイトは何をしているか」といった後輩たちからの質問に親身に答えていました。（入試・広報課）

■秘密情報について理解深める 利益相反に関する研修会が9月13日（水）、1300L講義室で開催され、本学園顧問弁護士馬場啓弁護士が「産学連携と情報管理」と題して講演しました。大学における利益相反について復習した後、情報管理について解説。産学連携により必然的に生まれる秘密情報について本学でも守秘義務に係る規程を設けている、と説明しました。また、秘密保持のためのステップや経済産業省が出している「大学における秘密情報の保護ハンドブック」なども紹介し、秘密情報のレベルや情報漏洩対策についても解説しました。

（入試・広報課）



研修会で講演する馬場弁護士